



TITLE:

土佐國伊野盆地に於ける上中部三疊[紀]層の發見

AUTHOR(S):

山内, 信雄; [平]田, 茂留

CITATION:

山内, 信雄 ...[et al]. 土佐國伊野盆地に於ける上中部三疊[紀]層の發見. 地球 1936, 26(3): 190-194

ISSUE DATE:

1936-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184603>

RIGHT:

J—L アカシゲミ(新種) (*Elaeagnus akashiensis* n. sp.) Jは小枝、Kは葉、Lは堅果
M ハリナガメキ(新種) (*Berberis longispinus* n. sp.) の針葉
N—O ニレバケヤキ(新種) (*Zelkova Ungerii* Kovats) Nは種子、Oは葉

土佐國伊野盆地に於ける 上中部三疊紀層の發見

山 内 信 雄
平 田 茂 留

緒 言

高知市附近の中生層を追及するに際し今回圖らずも伊野盆地に於いて上中部三疊紀層を發見するに至つた。從來佐川盆地に於ける三疊紀層の連續は日下村以東に於いては不明であつたが今回の發見により其の東方への延長は今後益々擴大せらるゝの狀態にあるに鑑み四國研究上極めて重要なを以て本稿を草する事とした。

この機會に際して御指導を賜はつた江原博士の厚意に對し茲に深謝する次第である。

三 疊 紀 層

本地域の三疊紀層は秩父古生層及び蛇紋岩の間に介在し南北二帯に亘つて分布し南帯はダオネラ層であつて北帯はプスードモノチス及びハロピア層である。

南帯は主として砂岩頁岩より成り、略東西に走り、北に向て傾斜するも西部に於いては時に南に傾むき秩父古生層との間には擾亂地帯があつて斷層を以つて境してゐる。

今南帯より得た化石を擧げると

伊野町奥名の西方より

Natica sp. *Daonella* sp.

伊野町奥名と黒岩谷の中間より

Daonella densisulcata YABE and SHIMIZU.

伊野町黒岩谷に於いては

Daonella densisulcata YABE and SHIMIZU. *Dentalium* sp.

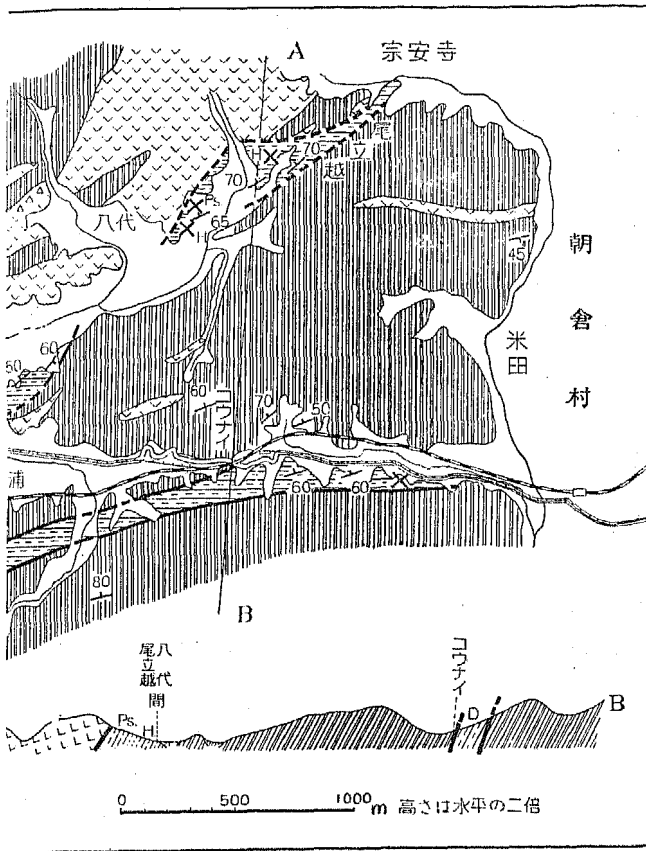
を産するが猶此の他伊野町沖田、天満宮境内、及び宇治村宇西浦の南方よりも一種の介化石を産する。

北帯は同じく主として砂岩頁岩より成り尾立越西方に於いてはレンズ状の石灰岩を介在する。走向は略東北—西南であつて北に向つて五十度乃至七十度傾斜してゐる。下部はハロピア層より成り

其の上にスードモノチス層が整合に乗つてゐる。

そのハロビア層より得たる化石は

宇治村八代より



Halobia sp.

宇治村尾立越西方よりは

Halobia sp.

Myophoria sp.?

Pecten sp.?

Podozamites sp. を

産する。

スードモノチス層より得

たる化石は

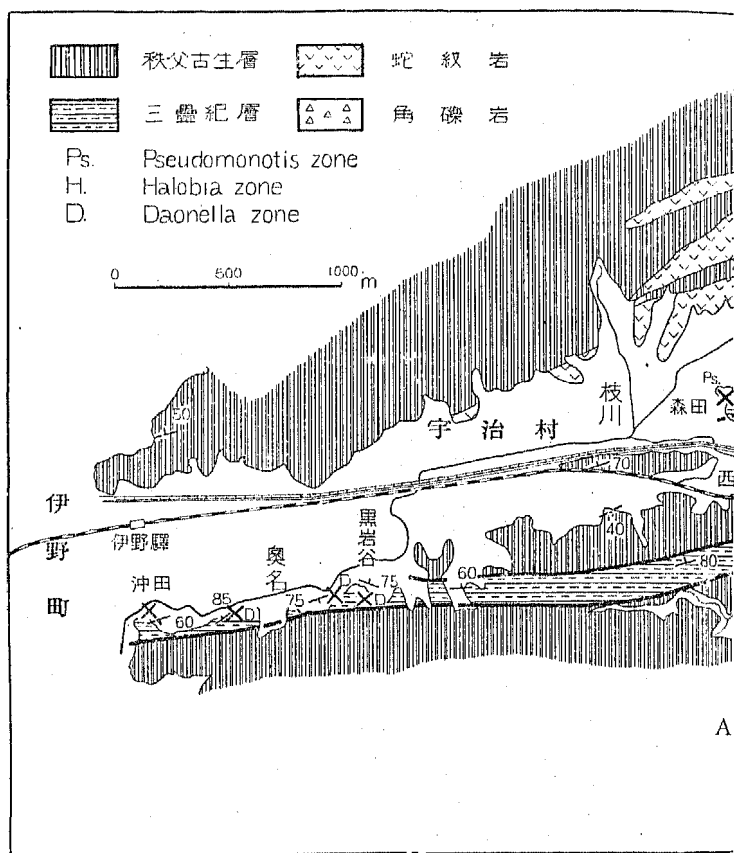
宇治村森田より

Pseudomonotis sp.

宇治村八代より

Pseudomonotis

ochoica var.



eurachis TELLER.

を産する。猶此の他尾立越西方に於いてはハロビヤ層の上部(西北方)に八代及び森田のスードモノチス砂岩と同質のものが存在してゐる。

然して之等の三疊紀層は伊野盆地西部なる川内村字西山附近の植物破片を含む砂岩頁岩層に連續するものと思はれる。

要するに本地域の三疊紀層は小林博士の佐川盆地三疊紀層の第二帯(岡崎・藏法院・横山谷)及第三帯(山室・河内ヶ谷・下山・日

下)の延長であつてこれは尙ほ東方に連續するものであらう。

江若の國境栗柄峠

小牧實繁
木村憲治

江若國境峠の一つ栗柄峠は元來がさう利用せられた峠ではない。併しその道は湖北高島郡の今津・海津と若狹の河原市^{カライチ}とを結ぶ縣道でもあり、局部的にも以前は開田^{カイデ}・牧野の人達が峠を越して栗柄の部落まで炭を負ひに行き、また馬に着けて出しもしたので、この峠も若干は利用せられたのである。

ところが今ではさうではない。山葵^{ウサドリ}や獨活の自生するといふ淋しい峠で、近來流行のハイキングにも殆んど荒されてゐない利用價値の殆んど

ど零に近い峠である。剩へ峠の若狹側の麓の部落、栗柄は元來數戸の家を有したのが今は凡て松谷^{マツタ}の方面に出て全滅してゐるのである。又、栗柄と松谷との間の岩蔭には盆栽用の岩芝があり、この芝は此の邊でも此所だけにしかなくその上品を採るのは命懸けであると言ふのである。

私達の好奇心は愈々唆られて今年五月十日牧野から若狹に越して見ることにしたのである。國境までは花崗岩質の山に相當いい道が刻ま